

地域文化倶楽部（仮称）の創設に向けた文化部活動の在り方に関する 検討会議（第2回）

【開催日時】2020年6月24日（水）10:07～11:57

【開催場所】オンラインにて実施

参加者】※敬称略

（委員）

氏名	所属・役職
揚石 明男	公益財団法人音楽文化創造事務局長
大坪 圭輔	武蔵野美術大学教職課程教授
岡田 猛	東京大学大学院教育学研究科・情報学環教授 東京大学芸術創造連携研究機構 副機構長
佐野 靖	東京藝術大学学長特命・社会連携センター長、教授
妹尾 昌俊	教育研究家、文部科学省委嘱学校業務改善アドバイザー
田村 孝子	公益社団法人全国公立文化施設協会副会長
内藤 賢一	公益社団法人全国高等学校文化連盟事務局長
野口 由美子	全国中学校文化連盟理事長
富士道 正尋	全日本中学校長会事務局次長
大和 滋	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会参与

（五十音順）

（文化庁）

氏名	所属・役職
根来 恭子	文化庁 参事官（芸術文化担当）付 文化戦略官（併）学校芸術教育室長
武富 雄一郎	文化庁 参事官（芸術文化担当）付 学校芸術教育室 文化活動振興係長

（事務局）

氏名	所属
高谷 徹	科学・安全事業本部 主席研究員
横山 宗明	科学・安全事業本部 主席研究員
沼田 雅美	科学・安全事業本部 主任研究員

藪本 沙織	科学・安全事業本部 研究員
加納 千紗都	科学・安全事業本部 研究員
太宰 結	科学・安全事業本部 研究員
鈴木 忍	科学・安全事業本部 リサーチ・アソシエイト

【議事】

- (1) 調査の進捗について
- (2) 委員からのご発表
- (3) ヒアリング調査について
- (4) 中間報告に向けた検討事項

【その他】

- (1) 今後のスケジュール

【配付資料】

- 資料 1 調査の進捗について
- 資料 2 部活動で大切にしたいことはなにか？（妹尾委員資料）
- 資料 3 ヒアリング調査について
- 資料 4-1 中間報告に向けた検討事項
- 資料 4-2 中間報告案
- 資料 4-3 文化施設による地域移行モデル例
- 資料 4-4 事例の整理

1. 開会

【事務局】

- それでは時間となりました。これより第2回地域文化倶楽部（仮称）の創設に向けた文化部活動の在り方に関する検討会議を開催いたします。本日は全ての先生方にご参集いただいております。ありがとうございます。
- 今回より委員長の佐野先生に司会をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議事

2.1 調査の進捗について

【佐野委員長】

- では、これより議題に入ります。各議題の終わりには、質疑応答の時間を設けたいと思います。
- それでは議事の1番から調査の進捗状況について、よろしくお願いいたします。

【事務局】

- それでは資料1に基づきまして説明をさせていただきます。
- 前回の会議では、調査内容とスケジュールについてご説明いたしました。今回は成果物についてご説明をさせていただきます。
- 本調査では以下の成果物を作成する予定になっております。有識者の会議報告といたしまして、部活動を学校外の活動とした場合の課題、今後の文化部活動の指導の在り方、指導者確保の方策、安全確保の方策、活動経費の負担の在り方・確保の方策、国の支援の在り方等についてとりまとめていく予定としております。
- また、今後の文化部活動の地域移行のモデルと先進事例のとりまとめを行う予定としております。
- そして、学校施設設備の開放の方針も作成いたしまして、これら4点を事業全体の報告書として11月末をめどにまとめさせていただきます。全国の自治体の教育委員会及び文化振興部署に対して発送するとともに、ホームページで公開する予定にしているところがございます。
- 調査の進捗について説明をさせていただきます。本日はクリーム色の部分についてご議論をいただきたいと考えております。地域移行のモデルに関しましては、7月に中間報告をとりまとめますので、本日骨子についてご議論いただきたいと考えております。
- また、先進事例のとりまとめに関しましては、現在事例調査をスタートさせたところですので、方向性についてご確認いただくとともに、ご助言いただければと考えております。
- 学校施設設備の開放の方針に関しましては、先進事例の収集とともに情報収集を進めているところがございます。こちらに関しては恐らく9月ごろの会議でご議論を

いただければと考えております。本件7月に中間報告をとりまとめるという都合上、第2回となりますけれども、かなり込み入ったところも議論していただければと考えておりますので、よろしく願いいたします。

- 中間報告を7月にとりまとめた後に、地域移行のモデルに関しては、全国のアンケートを実施するとともに、その他成果物作成に向けて11月末まで議論をしていただければと考えております。
- 当方からの説明は以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。何かご意見ご質問等ございましたらお願いいたします。いかがでしょうか。

2.2 委員からのご発表

【佐野委員長】

- では(2)の委員からのご発表ということで、妹尾委員、よろしくお願いいたします。

【妹尾委員】

- 皆様おはようございます。妹尾です。僕のほうから幾つか話題提供をさせていただければと思います。前回時間がなかったので、今回、機会をいただきましてありがとうございます。
- 僕のほうからは、今回の地域移行に関係することだけではなくて、部活動全般について、スポーツ庁とか文化庁の会議にも出ておりましたので、いろいろな取材をしたりとか、先生方のお話を聞いていることだとかも踏まえながら少しお話をさせていただいて、何かの素材なり参考にさせていただければと思っています。タイトルは、「部活動で大切にしたいことはなにか」ということで、運動部、文化部問わず、こういう視点は大事にしたほうがいいのではないかとという幾つかのサジェスションをさせていただければと思っています。
- 次のページは単なる僕の自己紹介なので、もしご関心があれば後でご覧いただければと思います。
- 前回の第1回の会議でも、やはりこの部活動の在り方については、先生たちの負担とか、働き方の部分が大きいという話がありました。この画面の共有ではかなり小さいかもしれませんが、スマートフォンでは全然見られないと思うのですが、もしよければ後でご覧いただければと思います。こちらは参考までに、僕が別の審議会の委員をしておりまして、岐阜市の会議に出ておりますので、そのときにご提供いただいたデータで、ある実際の公立中学校の時間外、いわゆる残業時間といいますか、昨年令和元年の4月、6月、11月の部分のある学校の全ての教職員の方のものが出ています。非常勤の方は出ていないかもしれませんが、講師の方も含めて校長先生からずらりと見えております。個別のことを言うつもりはなくて、この学校がすごく代表的な事例かどうかということも十分検証できているわけではないんですけども、よくあるパターンかなというふうに見ております。

- 国全体の大規模な調査は、2016年に教員勤務実態調査というのがありますので、そちらで全体的には傾向がわかるのですが、もう2016年のデータになっておりますので、この2019年の直近のもの事例として、あと個別に個々の先生方の状況がわかるので、すごく迫力があるのではないかと考えております。
- これは月平均の欄、一番右ですけれどもご覧いただければ、教頭先生は時間外が130時間と、ものすごい時間を働いていらっしゃる。教頭先生は2人いらっしゃるちょっと大規模校ですね。その下のほうの教員と書いてある方でも131時間という方もいらっしゃいます。もう少し下の教務主任とか進路担当とか、主任層は軒並み忙しくて、月当たりの残業時間が100時間を超えています。それ以外の方も、過労死ラインと呼ばれる80時間もゆうに超えている方もいらっしゃるということです。
- 何が言いたいかという、これはもちろん部活動のせいだけでは全くなくて、進路指導もあり授業準備もあり、いろいろなことがあわさっているんですけども、平均値とか丸めた数字だけ見るのではなくて、個々の先生方の状況を見ると、非常にそういったしんどい状況があるというのをご認識いただければということで、共有のためにお知らせいたしました。
- これはどういう影響があるかという、幾つか影響があるのですが、1つは皆様もご案内のとおり健康への影響というのがやはり大きいという部分があります。実際、先生方の中では、過労死と言いますか倒れられている先生も中にはいらっしゃいますし、こちらはよく報道されていらっしゃいますけれども、精神疾患等になる先生も多くて、小中高、特別支援学校含め年間5千人の教育職員の方が精神疾患で病気休職になられています。そこまでいなくても、病気休暇という手前の方もいらっしゃいますので、休職の予備軍という方を含めると、相当の方がメンタルを病んでいらっしゃる、過重労働で苦しんだりしております。
- それ以外の健康面以外の側面としては、こちらはあくまでも傍証なのですが、私の本でも少し引用しているのですが、私のほうで幾つか先生方に呼びかけてアンケートに答えてもらったのですが、先月どれぐらい本を読みましたかというシンプルなアンケートです。これはあくまでもインターネットを通じて呼びかけたので、かなりバイアスがかかっている可能性があるのですが、無作為抽出のようなちゃんとした調査ではないというご留意はいただきたいのですが、とはいえ、およその状況とか、1つの参考にはなるかなと思っています。ほとんど読まない人が多いと。漫画は除いています。
- きょうここは僕の部屋なのですが、僕も漫画が大好きで、こちらにも「キングダム」とかたくさんある漫画本、文化部でいうと「のだめカンタービレ」とかが大好きなんですけれども、漫画、小説は除いて幾つか本を、ノンフィクションとか教育書とかを読むかというふうに聞いてみたのですが、ゼロ冊という方がやはり3割4割小中高ともいらっしゃるということで、これも釈迦に説法なのですが、教員ですので、やはりインプットがないと子供たちにいい授業が本当にできるのだろうかということが疑問でして、もちろんこれは忙しいだけのせいではないと思うのですが、先生方は相当本を読む暇もないぐらいになっている、あるいは読むとか学び続けようという気になっていないというのを非常に心配しております。

- ぜひ、委員の皆さんと認識合わせといえますか共有したいことが幾つかあります。ここでは3点書いておりますけれども、1点目は先ほど岐阜市のデータで少し例示しましたけれども、かなり多くの方が過剰労働気味で、これは教員勤務実態調査という国の調査でも明らかになっております。
- 背景は、いろいろな要因があつてなかなか一言二言で言うのは難しいので、よければ後で聞いていただいても構いませんけれども、1つはやはりマルチタスクといえますか、1人の教員がたくさんの仕事をしていて、これは海外の学校とか教師と比べても相当たくさんのことを日本の先生は負っているということでもあります。しかも、子供のためという理由で、ビルド&ビルドといえますか、スクラップ&ビルドではなくて、どんどんお仕事が増えてしまっているということです。
- ご案内のとおり、新型コロナの影響で消毒作業やトイレ清掃を行い、たくさんの報告書を書き、あるいは土曜授業も増えたりとか、夏休みがなくなったりとか、いろいろな影響があつて、先生たちの負担増というのはコロナ前からも深刻でしたけれども、もっと今大変になってくる、そういう状況であります。
- 教員の健康は大変心配なのですけれども、加えて授業の質を上げることとか、自己研鑽が犠牲になっている可能性があるということをご心配しています。「たとえば」で書いてあるとおりですけれども、音楽の先生が吹奏部の顧問を頑張られている、これは素晴らしいことですし、私の娘も美術部ですけれども、すごく楽しんでやっております。本当に部活動の効果とか意義というのはすごく僕自身も感じているところなのですけれども、とはいえ先生方に余裕がなくて、例えば音楽の先生が国内外へ旅をしていろいろな音楽に触れたり、文化に触れたり、そういう時間的なゆとりが今小学校、中学校、高校ともなくなりつつあるということをご問題視しておりますし、本を読んでいないみたいなことから、そういうことは示唆されることじゃないかなというふうに思っています。
- ただし、部活動の在り方は教員の負担とかだけで考えるべきものではありませんので、あくまでも子供本位というか、子供たち目線で考えていく必要がありますし、生徒の参画も重要だということは共有しておきたいなと思います。
- きょうは、時間が限られていますので簡単に申し上げますけれども、私はよく校長先生とか教職員の方向けに研修とか講演を日頃やっているのですが、「そもそも部活動って何のためにやっていますか」ということを再度確認したりとかグループワークで議論してもらったりしています。もちろん、この答えもいろいろな答えがあつて構いませんし、こういうこと自体も生徒の参画とか生徒の意思表示も必要だと思っておりますけれども、そもそも何のためにやっているかという話とか、③ですけれども、そういったねらいとか意義とかはあるとしても、今の時間で本当にいいんでしょうかねという話なんかも一緒にしております。
- 何が言いたいかという、例えば校長研修でこういうことをやりますと、1番目のことについては、運動部、文化部問わず多くの校長先生方が、例えば「生徒の成長につながる」という話をされます。例えばチームワークが学べるとか、文化とか科学とかスポーツとかいろいろなものに触れることができるとか、体験できるとか、日々の授業だけではなかなか難しいような学びができるとか、あるいは先輩後輩なんかも含

めて人間関係が培われるとか、そういった教育的な意義をおっしゃいます。

- 僕は若干皮肉気味に、講演のときに申し上げるのは、「さすが校長先生方は教育者ですわ」という話をされます。といいますのは、誰も大会で勝ちたいとか、試合で優勝したいとか、そういうことはおっしゃらないのです。第一声としては。あくまでも教育的な意義のために部活動があるということをよく強調されるので、そこはやはり大事ですよと、もちろん大会とかで優勝できるというのはすばらしいことだし、それを目標にするのは誰も否定するものではないんだけど、そっちがメインじゃなくて、あくまでも子供たちの成長ですよと確認いたします。その上で、じゃあ週末もずっと潰すとか、平日もかなりずっとやるという在り方がいいかどうか、そもそものねらいに振り返って、いいかどうかというのも考えましようねという話をいたします。
- こちらは、運動部の話ではあるのですが、前の東京オリンピックのときの歴史なんかも振り返ると、友添先生という早稲田の先生、スポーツ庁のガイドラインをつくるときの座長の方ですけれども、友添先生の本に書かれてあったのは、部活動の歴史というものの1つの側面としては、「競技」と「教育」という対立する論理の葛藤の歴史でもあった、というふうに書かれてあります。それで競技の論理が教育の論理を押し切ってきた過程でもあるというふうに書かれてありました。
- これは友添先生に聞いていただくのが一番ですけれども、私なりに勝手に解釈をすると、要するに「勝ちたい」、「コンクールで賞をとる」というような競技の論理が、子供たちの成長になるとか文化に触れるという、教育の論理を少し押さえつけてきたというか、本来は教育の論理で動いていたものが、競技の論理のほうがどんどん強くなってきている歴史があったんじゃないかというふうに読みかえてもよろしいことではないかと思えます。これはもちろん一概に言える話ではないですけれども、少しこのあたりも振り返りたいことです。
- ここも細かく、これは友添先生が書いているわけではなくて、友添先生の本をもとに僕のほうで解釈して、例えばこんな対比ができるのではないかというふうに書いているものなので、これはあくまでも参考までに申し上げたいのですが、もちろん競技の論理を全く否定するというものではないですが、こちらが強くなりすぎるというものはいかなものかということは、部活動の原点からして考えたほうがいいのではないかなというふうに思っております。
- こちらは参考なのですが、先日少し、ビジネス書なので学術的な何か難しい本では全くないんですけれども、「RANGE」という本を読んでいたらかような論文が引用されておりました。もっと最近の研究では違うよということとかがあれば教えていただきたいのですが、これは音楽の話ですが、優秀な方は何が違うのかみたいな研究なんですけれども、1991年の論文なので少し古いですが、正味の練習量とか練習時間が優秀さとあまりちゃんと相関とかちゃんと関係していなかったという研究があったり、あるいは、本当に優秀な学生は、1つの楽器だけうまいのではなくて、3つの楽器にすごくたけていたり、あるいは半分以上の方が4つか5つの楽器を操っていたということで、これは何が言いたいかというと、1つのことを熱心に粘り強くやる、これはすばらしい能力でもありますが、実は1つだけではなくて、いろ

いろなところに実は練習したり視野を広げていったほうが実は成功するんじゃないかみたいな話を、音楽以外の話も含めて書いている本です。

- 何が言いたいかという、競技の論理とか、あるいは将来の芸術家とか文化を担う人材を育成するという観点に立ったとしても、あまり 1 つの部活に時間をとり過ぎるというのは考えたほうがいいかもしれないなと思いましたので、このあたりもまた、この材料だけでは不十分だと思いますけれども、ぜひ皆さんにも教えていただき、また議論をできればと思っております。
- こちらは参考資料ですけれども、東京都の部活動のガイドラインの中には、部活動の性格について書いておりますけれども、この赤線で引っ張ったところが大事だと思っております。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて取り組んでいこう。つまりアクティブラーニングの場として、普通の授業とか行事もあるわけですけれども、部活動もそういった発想ができるのではないかということです。
- ですから、例えば顧問の先生の言いなりに、とにかく部員たちが動くとか、とにかく指導者のいうとおりにばかりやるとか、そういう受け身のなものとかだけではなくて、子供たちが主体的に取り組んでいく、何かそういった部活動を通じて深い学びにしていくみたいなのところも大事ですよ、こういった原点も必要なんじゃないかなと思っております。
- 似たような話が札幌市のガイドラインにも書いてあって、「課題探求的な学習」の一環として部活動もあるのではないかということで、これは前回各委員の方が発表していただいたような事例なんかにも関係する話ではないかなと思っております。指導者は生徒に考えさせる部分と教える部分と両方が必要ですよということも、当たり前前の話ですけれども、重要なことかなと思っております。
- ここもごめんなさい、話し出すとまた長くなるかもしれないのでなるべく短く申し上げますが、コロナ禍であるいは休校が長引いた中で、いろいろ見えてきたことがあるのではないかなと思っております。例えば、学校って勉強する、学習する、教育するという機能はもちろん大事ですけれども、それ以外の役割はやはり大きかったというのがあるんじゃないかなと思っております。今回、部活動もお休みになったところがほとんどですけれども、やはり子供たち同士の関係をつくるとか、交流をする中で成長していくみたいなのところが、この 2、3 カ月できなかったというところは非常に残念だったんだろうなと思っております。ですから、部活動の意義を、勝ちたいとかそういうことだけではなくて、関係をつくるとか人間関係の中で子供たちが学んでいくみたいなの原点も大事にしたいなということです。
- それから 2 番目は、例えば宿題をたくさん渡された場合に自学自習の進んだ子となかなか進まなかった子がそれぞれいましたね。小学生なのか高校生なのかによってもその辺も全然違いますけれども、そういった部分でも本来、主体的な子供とか自律的な学習者というのが多分学校教育の 1 つの理念にあったと思うのですけれども、十分そこがうまくいっていたのかどうかということがかなり突きつけられたコロナ禍だったのではないかなと思っております。こういった観点からも、先ほど申し上げたアクティブラーニングの一環としても部活動を見直していくという視点が大事で、これを地域移行しようがしまいが、こういった部分は大事にしていかないとうまく

いかないんじゃないかなと思っています。

- 次のところは、また必要であれば申し上げますが省きます。
- 似たような話が平岡先生、宇城市の教育長さんですけれども、もともとはサッカーの名指導者として有名な方なので、Jリーガーをたくさん輩出している高校の先生でしたけれども、平岡さんがおっしゃっているのは、部活動を通じて生徒に身につけさせたいというか、生徒に育みたいのは、24時間をデザインする力ですとおっしゃっています。細かくはまた読んでいただければと思いますが、まさにこの休校中にだらだら過ごしちゃった子と、だらだら過ごすのが一概に悪いわけじゃないのですけれども、有効に活用できた子と活用できなかった子の差が、こういう時間をデザインするとか、自分でいろいろなことを探求できるみたいな力を学校教育が育めたかどうかということが問われているのではないかなと思います。
- こちらは中教審の「チームとしての学校」の答申で、少し前の答申ですけれども、これは部活動のことを言っているわけではなくて、どちらかというゲストティーチャーを呼ぶような、授業等で地域連携をしていく意義を述べた箇所ですけれども、部活動にも言える話ではないかなと思います。学校という場で教員に加えて多様な価値観とか経験を持った大人と接したり議論したりすることは、より厚みのある経験を積むことができ、本当の意味での「生きる力」を定着させることにつながるんじゃないかと書いてあります。
- これは要するに、教員と生徒だけではなくて、斜めの関係と言いますか、いろいろな大人とかいろいろな方とつながることで、子供たちの視野が本当に広がったり、いろいろな深みのある学びができたりするということで、地域移行を考えるときはこういった視点も大事になってくると思いますし、逆にいうと教員の負担軽減の観点だけで地域移行をやるという文脈だけではなくて、いろいろな大人と接したり、また別の経験ができる意味でも地域移行のメリットを言っていけないといけないかなと思っています。
- ただし、裏部活の話も前回ありましたとおり、そういうことも含めて地域移行をしてもなくても、トータルで部活動とかそれに類するものにもあまりにも子供を拘束してしまうと、今度子供たちの自由時間が減ったり、子供たちがまた別の活動することが減ったり、家族と過ごすことが減ったり、友達と遊ぶことが減ったりするわけですから、そういった影響も含めて、教員の負担だけではなくて子供たちの負担とか、子供たちの24時間をどうデザインするかという観点からも考えていけないといけないかなということをお話しておきたいと思います。
- すみません。長くなりましたけれども、私からの話は以上にしたと思います。ありがとうございます。

【佐野委員長】

- 貴重なご発表ありがとうございました。今の妹尾委員のご説明に関しまして何か、委員の先生方ご意見ご質問あればお願いいたします。

【内藤委員】

- どうもありがとうございました。すごくいい発表資料だったと思います。3点お伺い

させて下さい。

- 1つは7ページ目、調査において4月、6月、11月という月を設定した理由をお聞かせ下さい。
- それから2つ目、岐阜市の中学校を見ていますと、例えば先生方が、教頭先生もそうですけれども、2人いる場合は例えば交代で早目に帰るとか、部活動も複数でやっている場合は早目に帰るとか、要するに交代交代で早目に帰るとい、そういうことをやっているのかどうか2点目です。
- 3点目は、先ほど最後のところで、17ページですけれども、24時間をデザインする力というところで、部活動の練習時間100時間とあるんですけれども、例えば同じ集団の中でも部活で主体的にコミュニケーションをとりながら、要するに人間関係も含めて学びながら部活をするというふうにやっても、例えば一方ではもっと上手になりたいとか勝ちたいとかいうもっと上を目指していく生徒と、いや、このままで仲よく楽しみたいというグループに分かれてくるというケースはよくあると思うんですけれども、そのときにどういう指導をしているのかといういい例があれば教えていただきたいと思います。

【佐野委員長】

- 妹尾先生いかがでしょうか。

【妹尾委員】

- ありがとうございます。なるべく短くお答えします。1点目は、4月は、ご存知のとおり年度初めで一番忙しい時期の1つでもあるので、それを1つピックアップしたというのがあります。11月は教員勤務実態調査という国の調査を11月にやっています、大体おしなべて年間の中で繁忙期でも閑散期でもないということで選びました。その間ぐらいで6月というぐらいにしたところなので、そのぐらいの意味しかないです。
- 2番目の、教頭先生がいろいろ工夫されているかについては、すみません、個別の学校の事情をそんなに聞いているわけではないので、これはまだわからないということが答えになります。
- 3番目の、おっしゃるようにそういったグループとか子供たちの希望が分かれたときにどうしているかということで、その事例を僕もそんなに知っているわけではないので、また今回の調査とか、あるいは今回の調査以外でも構いませんが、何かあればまた共有をお互いにできればなというふうに思っています。
- 1つは、運動部の話になっちゃいますけれども、「ゆる部」というのが最近幾つかの中学校では現れ始めまして、先ほどおっしゃったような、少し仲良くゆるく運動不足解消みたいな感じです。あるいはスポーツを限定しない、週3しか練習しない部活をつくっている学校も中にはあって、そこは競技のほうとかあまり大会等のほうは目指さないという、最初からそういう位置づけでやっているところも中にはあります。ただ、いずれにしても、やはり生徒の自主的自発的な活動が部活動のもともとの原点にありますので、どういうことを目指すのかとか、何のためにやっているのだということも、生徒の意見とか対話とかをしながら、やはりどう考えていくかというこ

とかなというふうに思っております。以上です。

【内藤委員】

- ありがとうございます。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。ほかに。

【岡田委員】

- とても基本的にはすごく同意してしまして、大事な話をされたと思うのですけれども、1つ現場の先生たちの話を聞くと、特に中学校ぐらいですけれども、学校の勉強にあまり適応できなくて部活に来るのが楽しみという生徒がいたりして、そうすると教員はその場で生徒指導ができるという話もあって、あともう1つは部活を指導したいから教員になったという人も一定数いるという話もありまして、だから地域移行のとき全てそのまま移行するのか、あるいはそういったことを生かすような形の仕組みもちょっと残すというか、取り込んだ形で何かできることがあるかということについては、どうお考えでしょうか。

【妹尾委員】

- ありがとうございます。そうですね、おっしゃるように部活動が中学生なり高校生なり、あるいは小学校でも中には文化部があるところもあると思いますけれども、そういった子供たちにとって非常に学校に来る楽しみとか居場所になっているという機能はすごく大事だと思うので、ただちに部活動を何かやめちゃえとか、全部地域に行っちゃえということは、僕個人としては非常に乱暴な議論だなと思っていますので、そこはそういった機能を考えながらどうしていくかということはあるかなと思います。
- ただ、先ほどの部活動をやりたくて教員になったという話も関係するのですけれども、もちろん部活を通じて子供たちの居場所になったり成長になったりする要素はすごく大きいというのは非常に賛成しているのですが、一方でやはり圧倒的に授業の時間がかなり時間も長いですし、先生方の本業は授業、教育課程のほうだと思いますので、やはり授業でも子供たちを救ってほしいといいますが、授業でも子供たちがなるべく楽しい授業をしていただくというのが、そこが王道といえば王道かなと思います。
- ただ、先ほどいろいろなことを言いましたけれども、先生方がそういったおもしろい授業をしていくためには、いろいろな学力とか意欲もありますので、非常にかじとりが難しいかとは思いますが、先生方大変ご苦労されているのだとは思いますが、先生方が授業準備をしたり、先生方が自己研鑽をしたりする時間が今どんどんなくなってきているという部分があります。これは部活動だけのせいではなくて、いろいろな原因がありますけれども、ぶっちゃけ部活をやるとかなりの時間をとられる部分がありますので、正直授業がちょっといまいちの方というか、授業の課題の大きい先生は、正直もうちょっと授業準備をしっかりやってほしいなという思いがあります。そういった部分もありますし、部活動を指導したいから教員になったという動機は全く

否定はしませんけれども、まずは授業で子供たちを伸ばしていただくということかと思えます。

- また、完全に地域移行にはなかなかならないとは思いますが、仮に地域移行を完全な形でやったとしても、その先生が住まわれる地域で指導者になるとか、今も小学校の一部の陸上とかサッカーとかでは、週末とかは小学校の先生が指導者を兼ねていたりする例がありますけれども、そういったものも 1 つのモデルとしてはあってもいいのかなとは思いますが。ただ、やはり本業がおろそかになっていったら困るので、そこはちょっと釘を刺したいなという思いはございます。

【岡田委員】

- 本業の件に関しては賛同いたします。

【佐野委員長】

- ほかにいかがでしょうか。

【揚石委員】

- 長時間労働のデータですとか、本を全然読まない先生がこんなにたくさんいらっしゃるのを非常に興味深く拝見させていただきました。ありがとうございます。
- もう 1 つ、もしわかれば教えていただきたいのですが、そういった状況の中で先生方はどう思っているのか、意識調査みたいなデータはあるのでしょうか。妹尾先生はいろいろな先生方といろいろな深いお話をされていらっしゃると思いますので、データがないにしても、先生が持っている印象とか、そういったところをお聞かせいただければと思います。

【妹尾委員】

- ありがとうございます。僕のほうのデータではなくて、名古屋大学の内田良先生がよく調査されているので、もし必要であれば次回かあるいはメールで共有しますが、ちょっと今うろ覚えなので若干不正確ですが、文化部、運動部まざっていても、教員の中でも、部活動をやりたいかどうかはかなり二分化されています。大体 4 割ぐらいの先生がやりたい、部活動大好きという先生ですが、3 割とか 4 割弱ぐらいが、できれば、例えば自分の得意な部活動以外を持たされているケースもあるので、やりたくないとおっしゃっています。先生方の価値観も、ひょっとすると 20 年前 30 年前からは変わったのかもしれませんが、昔のデータはなかなかないので、直近のここ 3~4 年ぐらいの状況がわかるデータは幾つかございます。

【佐野委員長】

- よろしいですか。田村先生どうぞ。

【田村委員】

- 伺っていた中で、教育というのをどのように考えていらっしゃるかという、よくエデュケーションと教育は違うと言われますが、こんなに芸術教育というものが義務教育の中に入っているのに、その役割を果たしてきたかという疑問もあつたりいたしますので、教育といったときにどのように考えているのかというのがちょっと問題

ではないかなことを思ったりしています。いかがでございますか。

【妹尾委員】

- ありがとうございます。ちょっと大先生たちを前にして僕のほうで申し上げるのは非常におこがましいのですけれども、おっしゃるようにエデュケーションの部分をもともと引き出すとかそういういろいろな語源にもありましたように、そもそも僕のプレゼンにもありましたが、子供たちの主体性とか子供たちがこういうふうにやりたいと、子供たちの創意工夫だとかももっと引き出すような教育なり学びになっていく必要があるというのは、これは教育の定義、エデュケーションの定義をどうするかを脇に置いたとしても、中学校なり高校でもすごく大事になってきているというのは、多分共通認識としてあるのではないかと思います。
- 問題は、通常の例えば美術とか音楽とか芸術教科等の授業もどうなっているかという部分と、あと文化部での部活動でもそういった子供たちの主体性と子供たちの好奇心などを引き出すようなものができているかどうかということがかなり問われているといいますか、さっきの競技の論理のほうが強くなれば強くなるほど、もちろんそれは矛盾する話ではなくて、競技性も求めつつ教育的な意義も高めていくという部活動もあるとは思うのですけれども、ともすればとにかくコンクールに入賞するぞということで、あまり子供たちの思いとか子供たちの主体性みたいなところが少し脇に追いやられているような部活運営もあるかもしれないなということは気がかりになっています。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。ほかの議題もありますので、妹尾委員のご発表に関してはこのあたりで質疑応答を切らせていただきます。どうも貴重なご発表ありがとうございます。
- いずれにしても、いろいろな大会がなくなって、むしろ部活動の在り方そのものを少し考えたり転換させたりするいい機会かもしれないかなとは思っています。吹奏楽の顧問とか合唱の顧問は、多分旅どころかコンサートにも行っていない。夜 7 時からのコンサートに午後 6 時に出るなんていうことは、多分体力的にも意欲の面でも無理な状態がきているので、自己研鑽していただくような時間、ゆとり、いろいろなことを考えていけないといけない時代にきているということは、今日のご発表からも実感させられました。

2.3 ヒアリング調査について

【佐野委員長】

- では次の議題にまいります。事務局よりヒアリングについてよろしく申し上げます。

【事務局】

- 事務局よりヒアリング調査の進捗についてご報告を申し上げます。前回の第 1 回目の検討会でのご議論と、委員の皆様からお寄せいただいた情報を踏まえまして、対象者を再考して現在ヒアリングを実施中でございます。実施状況に関しては 1.1 をご覧

いただければと存じます。

- 現在、打診中、日程調整中が多くなっており、今のところ実施しているのは一般社団法人日本マーチングバンド協会様と、「あしぶえ」様、こちらは劇団ですが、メールインタビューで実施いたしました。他は、サザンクス筑後様という、九州の筑後市にある文化施設ですが、こちらは Zoom でインタビューを行っております。
- 本日、東京文化会館に、これからインタビューを行う予定です。また、今週、高津スポーツクラブ SELF という公立中学校の中にある総合型スポーツクラブへのインタビューや、福井県のハーモニーホールふくいへの Zoom のインタビューも予定しております。
- ヒアリングの実施にあたりましては、前回皆様にご指摘をいただきましたヒアリングの項目を見直し、事例シートを当社で作成、そちらを先方に先にお送りし、入力していただいた内容について、当日に深掘りするという形式をとっております。ただ、この事例シートのヒアリング項目は、必ずしも事業者様や実施者様で該当しない項目も多いので、可能な範囲でお答えいただくという形式で行っております。代替で資料などがあればお送りいただいております。
- また事業者様で複数の事業を実施している場合は、本調査の部活動の地域移行に一番近い事業に関してご説明いただくという方針で実施しております。既にウェブインタビューでヒアリングを行いました 2 件に関して、これから簡単にご報告したいと思えます。
- まず 1 番目、日本マーチングバンド協会様は、こちらはマーチングバンドの連盟系になります。協会様の活動そのものというよりは、マーチングバンドの学校内での部活動等の状況や、マーチングバンドの地域団体の状況についてお伺いいたしました。
- 資料に現在お示ししていますが、簡単にインタビューでのポイントをまとめておりますので、詳細は省かせていただきます。まず活動の状況としては、一番上に示しているのは中学校の状況になりますが、ガイドライン策定以降、学校内での活動が平日週 3 日、1 日当たりの時間が 2 時間になり、土日は 3 時間と限られることで、音楽の技術維持・向上面からは継続的な練習時間の確保が問題であるというお声が聞かれました。
- 少ない時間でも毎日できる環境というのが現場から望まれているというのを、協会独自のアンケート調査の結果からも得たという情報をいただきました。
- 現状から言えば、ガイドラインの解釈そのものが、学校により異なっているので、学校間での活動状況も異なるそうです。そのためガイドラインに則って 1 日あけて練習する学校もあれば、1 回あたりの練習時間を少なくして運用しているような学校もあるということで、練習時間が短くなっている中で、大会やお披露目をするような場に、これは「作品」と称していましたが、質を維持するために大会参加の作品自体の曲を短くすることで対応している学校が多いとのこと。これは中学校で顕著に見られる傾向で、高校はないとおっしゃっていました。
- 先ほど妹尾先生からもお話が出ました裏部活の話ですが、これは実際増えつつあると伺っております。どちらかという土日に限られており、平日は今のところないとのこと。土日の午前中は学校で部活動として活動し、午後は、保護者の主体での

管理のもとで、別の名前で活動しているということです。メンバーは同じですが、団体名としては全く違うということになります。楽器の運搬とか送迎は保護者の方が担当し、講師としては顧問や教員が名目上外部講師として指導を行っているという状況です。

- 学校外で活動を行うということについては、協会でも把握をしていますが、特にこれに対して何か対策をとっているわけではないということです。この学校外の活動には責任の所在が非常に重要となり、うまく連携して活動をしている例として広島の中立中学校の話をお聞きしました。これは、保護者と学校長の理解、加えて教育委員会の協力の下で、マーチングに限らず、クラブというものはまず人が集まり活動するという、学校内であろうと学校外であろうと、クラブであるという環境を認められる場合学校外でも活動を認めるとのことです。この学校は全国大会優勝の経験もある強豪校で、そういった理解のもとで活動しているということでございます。
- ただ、この広島市の公立中学校というのは非常に環境的に整っている例であり、全ての学校がこのようにうまくいくかという、難しいのではないかと思います。
- 指導者としては外部講師の依存度が高まりつつあるという話をいただきました。マーチングは、フォーメーションを組み、大勢で、ドリルデザインとおっしゃっていましたが演奏しながら隊列を組んで移動する際の、デザイン面というのも非常に問われるもので、演奏の技術指導や、フォーメーションのあたりで専門性を要するものは外部講師の依存度が非常に高まっているということです。ただ、全国大会に出るような強豪校は、パート別に外部講師を 1 人ずつ担当するというところをおっしゃっております。
- 協会では、協会独自の公認指導員認定制度を設けておまして、指導者の養成に力を入れており、指導者向けの講習会も開催しております。こちらは技術だけではなくて、指導者としての総合的な資質を「技術」として認定しているもので、例えば危機管理とか生徒との接し方、言葉遣い等とか、人を育てることに注力しているとのことでした。
- また、大学生も指導で参加することはあるということですが、仕事と言うよりはボランティアみたいな感じであるとおっしゃってました。音大生は専門的に教育を受けているので指導力は一般学生より高いということですが、それが仕事に結びついているかというところではない状況であるということでございます。
- 話は戻りますが、マーチングの指導者を本業としている人は全国に 20 名から 30 名程度で、ほとんどは本業が別であり、副業のような状態で母校や近隣の団体に教えに行くという状況のようです。
- マーチングの場合、吹奏楽と違って特殊な点として、室内だけで練習できる環境ではなくて、体育館などの広いところが必要になりますので、体育館の練習場所を確保するために、例えば学校では、運動系の部活との利用場所での調整が非常に困難になったという話を伺いました。これは、ガイドラインにより 1 日当たりの練習時間が限られていることで、下校時間が決まりますため運動系の部活が時間いっぱいまで使ってしまうと、マーチングバンドが練習できなくなるという状況があるとのことでした。

- また、公共体育館の利用条件に合わないため利用ができないという話も伺いました。これは、公共の体育館はスポーツ系の活動や団体に利用が限定されているというケースが多いそうです。そのため、マーチングバンドは文化系の活動となり、条件に合わないということで除外されてしまうそうです。また、今まで利用していた会場も、大きな音が鳴ることで、騒音などで近隣の住民からの苦情等により利用が禁止になるという例もあるそうです。
- マーチングバンドと運動系の部活と比較したときに、何が一番地域移行での問題となるかと伺いましたが、先ほどの場所の話に加え、楽器を自分で用意して調達するというのが非常に難しいということがあります。また、楽器の保管場所も大きな課題になっておりまして、学校内であれば学校の中で保管することはできますが、地域で活動しているような団体であると、例えばどこかに場所を借りて楽器の保管場所を確保する点で、先ほどの活動場所以外に保管場所の問題、また、資金という問題がございます。
- 課題をいくつか挙げていただきましたが、これから部活動を外に出す場合、に問題となる点をお聞きしますと、現在、外部講師への依存度が高くなっているということで、学校外に活動を移行する場合に、外部講師の方が果たす役割と責任が問われるのではないかとということをおっしゃっていました。
- 協会で提供している指導者公認制度や講習会は、講師の方が一定のスキルを持っているということで、安心する環境を提供できるという講師の質を担保することが目的だそうです。従って、協会としても活動を行っていますが、指導する側も自分たちが外部講師として果たす責任というのをもう少し認識すべきであるということをおっしゃっていました。
- 先ほど申し上げましたように、費用・保管・活動場所の問題はマーチングに限って言えば地域移行を行う際に非常に大きな課題であるということ、あと、マーチングに限らず、部活動とは学校の中に存在することに意義があるというケースもあるというお話を伺いました。
- これは、部活動が授業に参加できなくて不登校となっている子供の受け皿になっているようなケースが非常に多いそうです。マーチングというのは補欠やレギュラーがない全員参加型で、誰もが役割を与えられるそうです。従って、初めて入った子でも何らかの役割を与えられることで、自分の存在価値を見出すということが非常に重要であるとおっしゃっていました。
- また、ガイドラインに関してはこれを守った上で学校現場によって事情が異なるということがあり、強豪校のように目的意識がはっきりしてコンクールを目指すような学校もあれば、不登校の子の受け皿になって活動しているような学校もあるので、現場に応じた柔軟な運用での対応が望ましいという意見をお聞きいたしました。マーチングバンドという部活の状況としては参考になるかと思えます。
- 続けて、サザンクス筑後という文化施設のヒアリングを先日行いました。こちらは既に事業として地域や学校に対して文化活動を行っているケースになります。最初に申し上げますのは、地域のアウトリーチ事業で、こちらは派遣型でアーティストの方を学校に派遣して文化芸術の機会を提供しています。もともとこのサザンクス筑後

では演劇に力を入れているということがありまして、表現コミュニケーションプログラムからスタートして、今は芸術体験プログラムもあるそうです。こちらは(公財)筑後市文化振興公社、サザンクス筑後の指定管理者と市内の小中学校、教育委員会で連携して行っています。

- こちらの表現コミュニケーションプログラムは、既に小学校の授業に組み込まれておりまして、筑後市内の全11の小中学校で実施しているとのこと。ここでの個別プログラムは大体クラス単位や学年単位で決まりますので、30名程度ということになっております。これを実施するにあたって一番重要になることは、九州出身のアーティストを各学校に派遣してワークショップを行っていますが、まず学校と公社間で、どういうものを行うかという事前の打ち合わせを行って、また、その学校の状況を公社の方とアーティストの方で共有して、学校の状況を踏まえたプログラム、カリキュラムというのを提案しています。そのため、学校との調整にはアーティストと別のファシリテーター的な役割というのが重要ではないかということをおっしゃっていました。したがって、このような人材を養成することも課題であるとのこと。
- 現在は演劇のほう主流になっておりますが、今後は音楽のほうにも力を入れたらいいとのこと。しかしながら、そのような指導可能な人材を含めて、まだ開拓はできていない状況であるとの話を伺っています。
- 続いてサザンクス筑後のもう1つの主力事業ですが、既に22年目になる表現教育講座「こどものためのえんげきひろば」というものになります。先ほどサザンクス筑後では演劇に非常に力を入れているということをおっしゃいましたが、こちらの「えんげきひろば」は、子役や俳優というプロフェッショナルの養成を目指すのではなく、活動を通じて日常における表現力やコミュニケーション力を育成することが目的となっております。そのため、地元の小中学校の演劇部等の連携授業を行っているのではなく、地域の子供が個人で参加するプログラムを提供しています。筑後市だけではなくて周辺地域からも参加されております。
- 不登校とか、コミュニティにはなじめないような子が保護者の誘いで来る場合もあれば、自発的に参加されるような場合もあるそうです。こちらは演劇的プログラムが主力になっておりますので、まず、自分を表現するというところに主眼を置いております。身体を動かす活動なので、活動に当たってはスポーツ安全保険に全員加入することを義務づけています。
- 地域との連携については、地元の短期大学、九州大谷短期大学とかなり前から連携して活動しておるようで、短期大学の教授が演出を行ったり、舞台照明、音響のボランティアスタッフで大学生が参加するというところもあるそうです。
- 地域移行にあたってどのような点が問題にありますかという質問を投げかけたところ、地元で若い人の就労機会がないということで、せっかくこの「えんげきひろば」を受講しても、都市に人材が流出してし、講座出身者が地元に戻ってくるような環境がないというのがあります。そのため、地元で活躍できるような環境づくりが必要ではないかということをおっしゃっていました。
- また、こちらは個人参加型のプログラムなので、参加者側のほうで月謝の参加費用が発生しております。今後部活動の地域移行の受け皿とする際には、格差の是正の取り

組みなども必要なのではないかなと思われま。

- 最後に、口頭で簡単に補足としてご報告申し上げますが、「あしぶえ」はメールで幾つか重要なお話をいただきまして、今回の地域移行に関するご意見として、何事も地域によって事情が異なるということがまず前提にあります。あしぶえ様というのは島根県で活動していますが、島根県は非常に小さな地域になりまして、人口流出で地域の文化団体が非常に後継者不足で悩んでいるということ、子供たちに何か伝えるとか育てるといふ事業は非常に歓迎される可能性が地域として高いという話でございます。
- ただ、学校のクラブ活動をそのまま地域に移すというのは非常に難しいので、新しい発想で何がしかのプランづくりというのがあるのが重要なのではないかとご意見をいただきました、
- 以上、簡単ではございますがご報告申し上げます。

【事務局】

- 補足しますと、サザンクス筑後の事例に関しましては、学校と連携する場合、地域で活動する場合の課題について貴重なご示唆をいただけたかと認識しているところでございます。

【佐野委員長】

- 委員の先生方から何かございますでしょうか。ご質問ご感想なんでも結構ですが。

【富士道委員】

- 報告を紹介いただきましてありがとうございました。
- 1つは地域の移行のプロセスといいますか、今実際にはこうなっている、現状そして課題が中心になっていると思うのですが、そこにいわゆる学校という部活動が地域に移行していくようなケースの場合に、どのような背景があって、プロセスがあって、そういうような移行が可能になったのか、その際どのような人なのか、団体なのか、主体ですね、誰がその移行を推進していったのか。コーディネートしていったのかということを知りたいなと思います。
- 特に、これから教育委員会等にお配りになったとき、モデルはモデルとして示したとき、モデルで終わってしまったらだめだ、そのモデルに近づくためにどのような形で現実の部活動を移行させていけるのかどうか。そのためにもその途中経過いわゆるプロセスをぜひ私は知りたいなと思っておりますが、いかがでしょうか。

【事務局】

- 実際に完全移行した事例というのは今のところありませんが、例えばどういう形で持っていけるかという想定というか、仮説的にはなるかと思われまますが、それはできると思いま。活動状況を見ながら、こういう形でだんだん移っていくのではないかとこのプロセスを1つ1つ見せることはできるのではないかと考えております。
- こちらのよう施設あるいは文化団体が主催する場合の移行のモデルと、地域の教育支援のNPOや保護者主体の場合とは全く違いましますので、モデルの中にそのプロセスなど、ご指摘の部分を盛り込んでいくのが重要と考えているところま。

【富士道委員】

- いろいろなパターンが考えられるということですね。

【佐野委員長】

- どうぞ。

【大坪委員】

- サザンクス筑後さんの学校へ人材を派遣しているこの形のところで、データを見ますと通常は1回当たり2時間、45分2コマということで、中学校は部分的と書いているんですけども、この1回、要するに単発なんでしょうか。それともルーティンで定期的に行っていらっしゃるのでしょうか。

【事務局】

- 基本的には単発の授業です。授業の枠内でしているということでした。

【大坪委員】

- わかりました。ありがとうございます。

【佐野委員長】

- 出前授業みたいな形ですか。

【事務局】

- そうですね。出前授業に近いと思います。

【佐野委員長】

- 岡田先生どうぞ。

【岡田委員】

- サザンクス筑後さんのたしか短大の関わりがあるという話だったんですけども、これは基本的には全てボランティアがやっているのでしょうか。地元の短期大学との連携とあって、大学が関わる1つの在り方かなと思ったのですが、たまたまその教授がその館長であったということですが、参加費等どのようになっているのかお伺いできればと思います。

【事務局】

- 基本的にはボランティアとお伺いをしています。交通費等も含めて謝金が全く出ていないかどうかというところは、確認ができておりません。

【岡田委員】

- わかりました。

【佐野委員長】

- これは多分ここからは出ていなくても、ひょっとしたら大学の中で何かしらのサポートをしている場合もあるのではないのでしょうか。うちの大学もそんなことをやっていますよ。これはちょっと見えない部分もありますね。

【事務局】

- 確認させていただきます。ありがとうございます。

【佐野委員長】

- ほかによろしいでしょうか。

【内藤委員】

- 内藤です。マーチングバンドのところですが、裏部活といって土日の学校外活動ってありましたけれども、質問の 1 つは土日学校の外でやった場合も含めて、その学校というのは 1 週間の中で休日をとっているのですか。休みの日というか。それが 1 つです。
- あと 2 つ目のところは、学校内で部活をやる場合は先ほどのようにいいと思うんですけども、学校外でやったときに外部講師の指導というのを今度は誰が見るのかなという。例えば外部講師だけに任せるとするのはちょっとどうかなという気もあるんですけども、誰かが見回りをしているのかどうかということと、あと授業で見せる生徒の姿と、外部で部活動をやった場合部活で見せる生徒の様子というのはまた違ってくると思いますので、外部での生徒の様子というのは学校の担任とかなんかに連絡するというか報告するというか、そういう関係というのはあるんでしょうかというのが質問です。

【事務局】

- 1 点目に関しては、協会様が把握している限りは基本的には「土日どちらか」ということをおっしゃっていただきましたので、ガイドラインに大きく逸脱するようなやり方はしていないと考えております。午前中の部活動 3 時間に加えて、オプションとして午後の部分が裏部活という考え方という言い方をされておりました。
- 管理については、このような活動をしている学校全てを把握しているわけではないのですが、先生も、校外の音楽の施設や体育館等に行かれて午前中は部活動をして、午後はボランティアのスタッフとして残る形をとっていると、例示をしてくださった学校に関してはおっしゃってました。もちろんそれが全てではないかと思うんですが、管理体制がないと言うわけではないかと思えます。
- 外部講師については、学校外でするときのみいらっしゃるというより、学校での指導に関しても外部講師を使っていらっしゃるということでした。もちろん様々なパターンがあるかと思いますが、外部講師だけが生徒を見ることが一般的というわけではないということです。
- 補足ですが、大体、教職員の方と外部講師の方と 1 対 1 でペアになって組むようなことが多いという話を伺っておりますのと、あとそういう意味で協会のほうで公認指導員を認定しているというのは、外部講師の方の質を担保するという意味もあるのかと思っております。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。では次の、これはかなり重要なきょうのメンテーマかもしれませんが、モデル骨子案について事務局から検討事項をよろしく願いいたしま

す。

【事務局】

- ありがとうございます。先生方にはこちらの資料を事前送付させていただきました、委員長からお話がありましたように、非常に重要なテーマです。ただ、説明のほうは短く差し上げたいと思います。
- 資料は 26 ページから開始されますけれども、説明は 29 ページからスタートしたいと思います。次回第 3 回をもちまして中間報告を先生方にとりまとめていただきます。本日は、そちらの方向性について、先生方からお一人お一人ご議論をいただきたいというふうに考えております。
- このページは中間報告ですので、この会議はどういう会議であったかというところを簡単にまとめております。説明は省略いたします。
- 課題の整理を資料上半分でさせていただいております。重要なところは真ん中の赤い四角でございます。文化部活動の地域移行を推進するためには、「検証すべき項目」というものを実地で検証していくことが必要である。すなわち、文化部活動の地域移行モデルを構築そしてそれを国が支援し全国普及していくべきというのをこの会議での提言としていただいております。こちらについては既に先生方も合意をいただいているところかと存じます。
- ここからが重要でございます。モデルの構築に当たりましては、まず運営主体別にモデルを構築するというところをご提案いたします。
- 運営主体の例としてここに 5 つ挙げております。また、観点別に整理を実施すべきではないかというところについて、本日先生方にご意見をいただきたいところでございます。自治体の規模については先日から申し上げておりましたが、部活動の目的、そしてその移行された部活動がどこで実施されるか、そういうことを観点として整理をしていく必要があるのではないかと考えております。
- 少しまだ調査が進んでいない段階ではありますが、概念図を出させていただきました。まず左の縦軸でございますけれども、部活動の目的を 2 つに整理させていただきました。こちら必ずしも 2 つだけはないと思いますが、まず上のほうに高度な技術習得というのを軸として設けました。その下、部活動の目的としては、もちろん共に楽しむという目的も重要ですが、高度な技術習得の対義語としまして、芸術文化の体験というものも置かせていただきました。
- また下の横軸でございます。活動場所を学校内、学校外で整理をさせていただきました。水色では、事例をプロットしております。取材をしていない事例も含んでおります。ここで重要なのは 4 色で示しました枠でございます。こちらについてご覧ください。
- まず横に伸びております赤い「指導者の質、費用」という吹き出しがついている枠です。これは高度な技術習得を行う部活動の目的の場合には、地域移行した場合指導者の質や費用というのが問題になってくるのではないかと、という意味です。例えば、民間の外部指導者を利用する際、その外部指導者がどのような人物かというものは現在公的に免許などはございません。もちろん認定制度などを設けておられる団体も

ありますが、現在では教員免許のような免許がございませんので、指導者の質が課題となります。

- また、それほど高額でない費用で民間の外部指導者は指導をお引き受けされているということではありますが、ただそれが地域移行されてしまった場合、高額な費用になり得るという可能性もあります。そのため、この赤い枠に、吹き出しで課題をこのように整理をさせていただきました。
- そのため、ここの領域でモデルをつくる場合には、赤い四角の白抜き文字で記載しておりますが、指導者の質保証の仕組みが重要である、また、高額な費用にならないように、費用における格差是正の仕組みがこの領域のモデルでは重要である、という提言につなげていくイメージです。ここの赤い枠についてはこのようにご覧ください。
- その下の黄土色の枠については、継続性、財源と書かせていただきました。こちらの領域では、現在実施されている取り組みが単発、単年度の補助金に依存しがちでございます。そのため継続性、財源が課題になるとまとめさせていただきました。そこから安定化や組織化それから財政支援の仕組み、そういったものが必要になる、また指導に当たる大人がどのように選ばれるかということも取り組みとして重要になってくるとまとめさせていただいております。
- 続きまして横の軸のグリーン色の四角い枠をご覧ください。縦に伸びる四角でございます。こちらは、学校内で活動が行われる場合の課題と取り組みの方策をまとめております。説明は省略させていただきます。
- その次青い枠でございます。学校外の枠でございます。こちらは安全が問題になるというふうにもまとめさせていただいてまして、そのための方策というものを青い色の白抜き文字でまとめさせていただいております。
- 続きまして、その次のページをご覧ください。先ほどモデルを概念図でお示しましたが、モデルを示す以外にも論点として重要な部分がございます。この論点を 6 点まとめさせていただきました。1つ1つ読み上げることはいたしません、ヒアリングの中から特にマーチングバンドが大きな課題でございましたので、マーチングバンドのヒアリング結果を受けまして 6 点にまとめさせていただきました。こちらにつきましても先生方のご議論をいただければと考えております。
- 説明は以上でございます。そのほかの部分につきましても、ご質問をいただくたびに追加でご説明のほうをいたします。それでは佐野先生どうぞよろしくお願いいたします。

【佐野委員長】

- はい、ありがとうございます。これは委員の先生方お一人お一人にコメントなりご質問なりご指摘をいただければと思うんですが、あいうえお順とかだといつも揚石先生がトップで大和委員が一番最後になるので、挙手というか、僕がチェックしていきますので、必ずお1人1コメントでも2コメントでも結構ですので、ご意見をいただければと思います。
- 事務局側としては、この論点それから観点、それからこの整理イメージ図についての

ご意見をいただければということですね。

【事務局】

- はい。よろしく申し上げます。

【佐野委員長】

- はい。それではどなたからでも結構ですのでご意見いただけますでしょうか。

【大坪委員】

- 基本的な方向性としては私はこれで結構かと思っています。ただ、大きな疑問として、現在ある学校の部活動を地域社会に移管するという発想でいいのかなど、あるいは、そうではなくて、学校を取り巻く地域社会に新しい子供たちが文化的な活動ができるような場をつくっていくという方向で、結果的にそれが部活動の地域移管になる、というような考え方のほうが現実的ではないか、そのために国なりあるいは自治体なりの支援が必要になってくるだろうという発想のほうが、移行としてはよいのかなど。要するに、学校の部活動が持っている教育的意味、価値、これまでのずっと続いてきた生活指導も含めて、そういったものを一切切を地域の活動の中にそれは負わせるのは、これは無理なわけですから、そういった発想が必要であろうということがまず私の考え方にあるということです。
- それと、今回示していただいた 32 ページの表ですね。この中で場所が学校の中になるのか外になるのかということは、これはもうある程度将来的には学校の外になってほしいなというのがあるんですけども、そうもいかない部分があって、地域の実情もあればこの 2 つはやむを得ない。
- もう 1 つは、この縦の線の活動の目的のところ、高度な技術習得と芸術文化の体験と、性格的にはこういう分け方はわかるんですね。ただ、表としてこれが出てしまったときに、いささかちょっとこれを見た実際にこういう選択をしていくであろう子供たち、あるいはその保護者から見た場合に、若干違和感があるかなど。概念的にはわかるんですけども。
- 私はやはり子供たちが、先ほど妹尾さんのデータの中にもあったし、ほかの方からの意見にもあったんですけども、こういった活動で子供たちが文化的な専門家になることはまずあり得ないわけですね。だけど、彼らが将来的にはやはり文化の主体者であることは間違いないわけですね。社会全体の文化が広まっていったり、あるいは深まっていったりするためには、国民全体の文化レベルが上がってこないといけないわけで、そう考えたときに、例えば中学校の段階で、高度な文化的なことをやるためにここを選びました、あなたはそうじゃない人という分け方自体がちょっと無理があるなというふうに思っています。指導している立場からすれば、かなり全国大会目指して頑張っているマーチングバンドと、いや皆楽しみでやっているんだというところと性格が全く違うのがわかるんですね。ただ、こういう分け方、言葉だけでも少しそこは変えられないかなどと思って考えてはいるんですが、私は今適当な言葉を思いつかないのですが、このところは気になっています。ほかの委員の方々のご意見も聞きたいなというふうには思っています。以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。実は僕、この図をいただいたときに同じようなことを事務局に言いました。芸術系大学からの指導者派遣というのは、別に高度な技術習得で送っているわけではなくて、むしろスーパースターが行くことによって、その文化のよさあるいは演奏の質の高さに感動して、そういう芸術への理解者を増やしていくことで僕らはやっているんだという話をしたので、これは確かに一見わかりやすいんですけども誤解を生みかねない図だと思います。
- 岡田先生どうぞ。

【岡田委員】

- 今の発言に関連してよろしいでしょうか。まさに大坪先生とか佐野先生がおっしゃったような話に引っかかっておりまして、1つは、指導伝達モデルみたいなものの中ですらこういう文化的な活動を捉えてあるという感じがしまして、専門家が派遣されて教えに行くとかいう話になっているんですけど、多分場があってそこで表現や文化がつくられていくという、その場として捉えるということが必要なのかなという気がしました。
- つまり、今のままだと、例えば高度な技術習得、そこに私も引っかかったんですが、技術を獲得してというのはもしかしたらクラシックの音楽なんかに関しては、ピアノを弾けないと意味がないかもしれないけれども、美術のほうに関しては別に必ずしも完璧なデッサンができなければいけないということではなくて、むしろその中でいろいろな表現の本質的なものを学んでいくということが必要になってきて、それはさっき佐野先生がおっしゃったような、芸術系大学からの指導者派遣ということの中には、技術を獲得させるとか技術を指導するというのではない側面がいっぱい含まれている、この活動目的のところを2つに分けるということに対して違和感があるということと、そこに「技術」という言葉を使うべきかどうかというのはちょっと考えないといけないというのが1つあります。
- あとは先ほど言いましたように、全ての枠が指導しようという形になっていて、その中で子供たちも含めて何か生まれてくるという創造の部分というのがちょっと見えにくいという感じがしまして、実際になぜこういうところにアーティストたちが自発的に参加して教えるかという、自分の枠で何かを教えたいというのは子供たちの反応がすごくおもしろくて、そこに触発されて自分たちも学ぶことが多いというのを考えているわけで、そういった側面がもう少し何か含まれていいのかなということを思いました。
- あとは、学校内と外なんですけれども、この図を出されるとそれぞれの4つの部分が別々になっているように思えるんですけども、実際には前回私がお話ししましたように、オンラインとオフラインの組み合わせみたいな形で、学校の中側とか外側に自分の学校以外の地域の人たちとも、オンラインであれば勉強もできますし、そういった連携の話なんかについてももう少し何か記述があってもいいかなと思いました。
- あともう1点だけなんですけれども、芸術系大学からの指導者派遣というのは実質

的には多分無理ではないかと思えます。皆さんのほうが詳しいと思えますけれども、藝大のピアノ科の先生が中学校に行ってピアノを教えますということはあり得ないですので、こういったことはやはり学生をうまく組み込んでいかないと実質的にはできないのかなという感じがしました。以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。芸術系大学からの指導者派遣というのは、学生を含めたことではないのでしょうか。プロフェッサーが行っても悪影響のほうが大きいと思いますが、行きたい方はいると思えますけれども、恐らく学生も含めた若手の卒業生とかいろいろなことを含めているのではないですか。事務局どうぞ。

【事務局】

- はい。ありがとうございます。こちらの軸の見せ方、再検討いたします。
- 図の分け方について、ご議論いただきましてありがとうございます。この分け方をしたときに課題としてこういうことがあると吹き出しのほうでお示ししております。こちらの課題の設定の仕方も含めまして、先生方からご意見をいただければと思っております。

【佐野委員長】

- はい。ありがとうございます。ではほかの委員の先生方。

【大和委員】

- この目的について、学校の移行だけという言い方は本当にやめたほうがよくて、やはり全面的に地域でこういう文化芸術活動を支える場をつくっていくというような大目的にさせていただいたほうがいいたろうと思っています。
- そして、芸術団体の立場からずっと見ていて、学校教育で行われていない音楽と美術以外について、地域がかなり担ってきた地域の伝統的なものも含めて、子供たちに接する場をつくってきたというふうに思っております。例えば極端に言いますと民俗芸能とか、極端に言うとバレエ教室なんて全国で4千ぐらいあるわけですね。そういうような中で、地域にある、それと今回出ているいろいろなモデルというのがありますけれども、様々な主体がいろいろな試みをしてきていますので、学校の意向ということと同時に、やはり地域の問題としても捉える視点をいかに取り込んでいくかということをご希望したいと思います。
- それともう1つ、このモデルの考え方の図なんですが、いろいろ議論が出ており、課題のことについていいますと、地域移行にいったとき主体の問題をどう考えるか。それでいろいろ考えるんですけども、指導者の議論に加えて、いわゆるマネジメントの議論がないと地域はうまくいかない。継続性財源の問題を含めて一体誰がマネジメント、部活動の運営を担うのか。ここら辺の観点をきちんと押さえておかないと、指導者だけの議論ではうまくいかない。
- このマトリクスも高度な技術ということでもいいますと、例えば地域の教室がいっぱいあるとそこからある程度の才能のある人は違うところに進んでいって、地域のクラブの役割には才能を発掘するモデルみたいなものもあるんだろうと思います。

- 体育では生涯スポーツと競技スポーツというような言い方をしていますけれども、何かちょっと次元が違うモデルというか、専門家の問題と地域の問題というのは関連が深くあるんだけど、うまい切り分けをしていただいたほうがいいのかなというふうに思っています。以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。今のご意見に対して事務局何かありますか。

【事務局】

- ありがとうございます。指導者と書かせていただきましたが、マネジメント人材も非常に重要だと思っております。また、地域でどう担うか、大坪先生からのご指摘とも一致する課題のご指摘と存じます。こちらは今の軸の中では整理はできませんので、この後また検討させていただいて、次回会議でご覧いただけるようにしたいと思っております。ありがとうございます。

【佐野委員長】

- ほかに。どうぞ。

【揚石委員】

- そもそも論になって大変恐縮なんですけど、学校内の部活動を維持するためにいろいろな手をこれからそこに差し伸べていく議論なんではないでしょうか。いろいろな問題が今ありますよねというところで、その形でそのままやるというか、学校でそもそもやるのであれば、全員に平等に体験できる文化芸術教育が必要なんじゃないか。なぜ部活動なのかというのをやはり議論すべきだと思うし、あと、学校外に学校の中の教育みたいなものを持ち出して文化を教えましょうというのは無理ですね。
- 社会は、多様な人や仲間やいろいろなリソースがあって、先ほど大和委員からもありましたけれども、いろいろな文化芸術、多種多様です。それを学ぶための、それも同一の同学年の人だけが学ぶなんていうようなことでは文化を学べないんじゃないかと思うんですね。やはりお師匠さんみたいなすごい人生経験の豊かな人がいろいろな意味から指導するみたいなことだってあっていいと思うし、町の顔役や町の若い衆やいろいろな人たちが子供たちを見ていくような社会、育てていくような社会という、やはり社会教育の面が学校外では非常に重要だと思います。
- なので、何か単純に学校の文化部を中でやる外でやるという議論をしている意味があるのだろうか。ごめんなさい、そもそも論でちゃぶ台返しをしているようなことで申しわけないんですけども、何か根本的な部分をもうちよっとなら議論したほうがいいと思いますけども、ちよっとならどうなんでしょうか。

【佐野委員長】

- どうですか。事務局としては、非常に重要な根本的な。

【事務局】

- ありがとうございます。1つ目の論点の文化部活動の目的・意義に応じた段階的な地域移行というところに接続されていく論点かと思えます。ですので、ここに地域で芸

術活動を行うということと、教員の多忙を解消するということで部活動をどの程度移行すべきかという 1 つ目の論点を例えばブレイクダウンするような形も考えられるかと思っております。

【佐野委員長】

- 大坪先生も 2 つあるだろうということをおっしゃっておいりましたので、その新しいモデルづくりというか、今ある社会教育的な、今揚石委員からご指摘のあったような形のものを含めて、今度それを地域の文化クラブとして見て行くというそういうことですね。それと今、学校にあるものを出していく。でも、その出し方が学校からそのまま移すだけでは何の意味もないので、かえって教員が過重負担になってしまうかとなるので、そのあたりをいろいろなパターンを慎重にやっていかないといけないと思うんですけども。
- きょうの中間まとめの論点は、恐らくマーチングバンドのヒアリングがかなり大きいですが、あそこはそんなにオーソドックスな形ではなく、かなりマニアックな部分があります。もうちょっと広く調査を進めていく上で、今これだけでは、ちょっと語れないなというのは印象としてはあります。

【事務局】

- ありがとうございます。

【揚石委員】

- やり方としては問題ないと思っているんです。学校の文化部をどのように移行していくかというのも、ちゃんとこうやって段階的にやっていく移行していくというモデルを示すのも必要だと思いますから、それはそれとして議論して深めていくべきだと思いますけれども、もう 1 つ根本的な部分の提言というののもあってもいいんじゃないかなという、そういうことを言いたかったんですね。

【佐野委員長】

- もともと文化庁が大事にしてきたものというの、こういう機会にプロジェクトでもまた見直していくということはとても大切なことだと思いますので、貴重なご指摘ありがとうございます。どうぞ田村先生。

【田村委員】

- 今おっしゃったことがやはり一番大事かと思えます。そして文化庁が 2005～2006 年だったと思うんですけど、全国の地域の文化活動に 1 億円を配ろうとしたときがあるんです。それが 60 件だったので、少ないのではないかと思いましたが、申請したところが 19、採用されたところが 13、これが現実でございます。要するに文化活動に興味を持ってくれない人たちにどうやって届けるかというのは、本当だったら地域にとっては一番大事なことはないかと思っております。
- そういう意味で先ほどから話の出ているところをきちんと捉えたほうがいいというのは私も思います。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。

【富士道委員】

- 今ずっと議論をお聞きしていたんですが、例えば 33 ページの一番上には「段階的な地域移行」というキーワードが入っているんですね。32 ページにあるモデル図を最初に拝見したときに、これはいわゆる完成形というか最終形なんだろうけれども、現実の学校の部活とかけ離れているなど。
- 例えばイベントが何か一覧のように見えてしまっていて、日々子供たちは学校の中で部活をやっているわけで、それを最終的にここへ持って行くためにいろいろ段階があっただろう、そういう意味でちょっと違和感があった。そういう意味でぜひこれは中間まとめの中で、特に段階的な地域移行というところは大変重要なことだと思います。つまり、一気に飛び出さないと。
- もう 1 つは 33 ページ 3 点目にありますけれども、特に移行するためには教育委員会との連携、学校にしてみれば教育委員会がバックにつかないとなかなか動けない。校長 1 人が頑張ったって、できるわけないんですね。そういう意味ではこういう地域連携のためにも、教育委員会のバックアップ、こういう連携が大切だというのが重要なことですが、その成功例とかいろいろな事例ももしわかればどんどん出していい、そんなことが必要かなと思っています。以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。教育委員会プラス恐らく文化行政振興を担当するような課、そのあたりと行政と一緒にしていく必要があると思います。
- ありがとうございます。ほかに、野口先生、妹尾先生、内藤先生いかがでしょうか。

【内藤委員】

- ありがとうございます。先ほどの表はそのとおりなのかなと思うんですが、最初に戻って妹尾委員さんのほうからありましたけれども、やはり教育とは何なのか、要するに部活動とは何なのかというところの原点に戻ってしまうと、地域に移行できるものと地域じゃなくても学校でできるものがあるなという感じには思います。地域に移行できるものといえばこうやって見えていますと技術とか指導者を必要とするような部活というふうなところになっていくかと思うんですが、学校でもできるものがあるし、その分け方は大事になってくると思うんですが、やはり根本に文化というと、やはり中学校 3 年高校 3 年の 6 年間で終わるべきものではなくて、その生徒の人生をやはり将来豊かにしていくための文化に関わっていく、文化の主体性となっていくというそういう存在というか、それをやはり基本に置いておいたほうがいいなというふうには思います。
- 高校 3 年で終わりではなくて、その生徒たちが部活動を通して将来自分の人生を豊かにしていける、あるいは一生それに取り組んでいけるというか、やっていくというところもあると思うので、単に技術の習得だけではないというところの部活動の在り方をやはり根本に置いておくことも必要かなと思います。以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。こういう文化クラブで育った人がいずれまた社会人になって、今度は指導者でOBとして戻ってくるみたいな、うまいことサイクルが繋がっていけばいいと思うんですが、ほかに妹尾先生、野口先生いかがでしょうか。

【妹尾委員】

- 3点関係することで申し上げたいと思います。1つ目は先ほどの4象限の話で縦軸の話なんですけれども、ここはまた議論すればいいと思いますが、これでもいいかなという感じもしたんですけれども、ちょっと言い換えているだけかもしれませんが、文化芸術の裾野を広げていこうという方向性と、あと技術も含めて質を上げていこうということと、多分両面があるんだろうなと思います。ひょっとするとですけども違和感があるのは、両方兼ねる部分がありますね。裾野も広げながら技術力、質も上げるということもあるので、完全に対立する概念ではないので、その部分も含めて少し考えないといけないかなとは思っています。
- とはいえ、活動目的のところ、もう少し別の言い方をすればゆるい部活と僕のプレゼンでいうところの競技性といいますか、大会等を目指していくところの部活動との違いというぐらいのイメージではしやすいといえればしやすい話なので、ここもどうするかは要検討かなとは思いました。これが1点目です。
- 2点目は、そことも関係するんですけれども、上のほうの部分の特に競技性とか大会等を目指していく面では、指導者の質とか費用面が課題だと書かれてあって、そこは賛成なんですけれども、それに加えて子供たちの時間とか負担の問題の話も32ページとか33ページでもっとするべきではないかと思っています。つまり、高度な技術力とか大会等に入賞するとなると、子供たちの時間をたくさん使っていく、先ほどの裏部活、闇部活の話とも関係するんですけれども、それが一概に悪いというわけではなくて、いい悪いとそんなに簡単に言える話ではないと思いますが、とはいえ、子供たちの多様な経験とかいろいろな時間が犠牲になるという部分もありますので、その話も考えないといけないというのは強調しておきたいなと思います。これが2点目です。
- 3点目は、先ほどのそもそも論にも関係することかと思えますけれども、ちょっと僕のほうでもまだもやもやしていて、ちゃんと整理できているわけじゃないんですけれども3つの活動の違いとかがグラデーションというかになっていて、ちょっとあいまいになっているかなと思います。
- 3つというのは、1つは授業の中あるいは教育課程の中で文化芸術をやっていくというのが1つ目です。教育課程の中でやっていく。2つ目は部活動ということで、教育課程外なだけでその教育課程とも関係づけながら学校教育の1つとしてやっていくということが2つ目。3つ目は純粋に習い事とかレッスンを受けに行くとか、純粋にプライベートな活動としてやっていくという、こういう3つの文化芸術の触れ方とか、子供たちの成長がある中で、その違いは何なのとか、部活動だとこれはちょっとだめでこれはいいとか、結構配慮することがそれぞれ違ってくると思います。

- もちろん 1 つ目に近づけば近づくほど全員が参加するとかそういうふうにもなっていくますし、プライベートになればなるほど費用負担がかかってくるとか、そういう違いはあると思うんですけども、今回は部活動の地域移行といったときに 1 つ目 2 つ目 3 つ目のそれぞれの要素とか間がありますので、そこをどう頭を整理していくとかか留意点をどう考えていくかというのは考えないといけないなと思っています。以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。野口先生。

【野口委員】

- いろいろなご意見本当にありがとうございました。妹尾先生のお話からは本当に学校がいろいろ抱え込み過ぎているなということを感じました。地域への移行は今後必要な方向なのかなというふうに思っています。
- 片や子供たちにとってはどうなのか。部活動のよさは選べるということだと思うんですね。学校でやりたくない子を無理矢理やらせるというのではなくて、自分がやりたいことを選べるという観点がすごくいいのかなと思っていますので、この表の中に「高度な技術」とか「ゆるい」という言葉もいいんですけども、子供たちが選べるよという観点もどこかに入れていただけたらいいのかなというふうに思っています。以上です。

【佐野委員長】

- ありがとうございます。これで一通りのご意見をいただきましたが、どうしても言い足りないとか何か思いついたという方があったらどうぞ遠慮なく。よろしいでしょうか。大丈夫ですか。事務局からちょっとここを聞きたいとかもしありましたら。

【事務局】

- 非常に重要なお指摘を多数ありがとうございました。今回まだヒアリングが進んでいない段階なので、いただいたお話を今後ヒアリング調査に加えながら進めて参ります。中間報告までに、第3回会議で全員の先生から再びご意見をいただきますが、いただいたご意見をさらに深掘りさせていただく意味で、個別に先生方にご相談させていただく可能性がございます。その際はまたご協力をいただければと存じます。

【佐野委員長】

- はい。では、きょうの議論については終了でよろしいですか。では事務局のほうにお返しいたします。

3. その他

3.1 今後のスケジュール

【事務局】

- 様々なご意見をありがとうございました。今後のスケジュールに関しまして、日程調

整のお願いをしているところでございます。7月中下旬の開催を予定しておりますので、ご返信くださいましたら速やかに日程確定の上、ご案内をさせていただきます。事務局からの連絡は以上でございます。

- これで本日の第 2 回検討会議を閉会とさせていただきたいと思っております。ご出席いただきましてまことにありがとうございました。

(了)